

図書館と文学館の連携

岡野 裕行*

文学館と呼ばれる施設は、文学を対象とした専門図書館として機能している。また、文学館は博物館や文書館としての特徴も兼ね備えている。図書館と文学館との連携には、施設の規模による違いが見られる。連携を考える場合には、それぞれの施設の形態のみに注目するのではなく、収集対象としている資料の主題分野のほか、それに関係する個人や団体にも関心を払うことが求められる。

キーワード：図書館、文学館、博物館、文書館、文学資料

1. はじめに

文学館を対象とした業界団体として、日本近代文学館（目黒区、1962年設立・1967年開館）を中心に全国文学館協議会が発足したのは、今から16年前に遡った1995年のことである¹⁾。図書館や博物館、文書館などの諸施設に比べても、文学館を対象とした議論の歴史は浅く、その専門的な研究の蓄積は、それほど多くはないというのが現状である。

全国文学館協議会では、全国各地の文学館職員同士による共同討議が、発足から毎年のように開催されている。それらの活動記録は、『全国文学館協議会会報』という逐次刊行物としてまとめられ、年ごとに3-4冊ずつの出版がなされている。現状では、内容面の充実度からも継続性という面からも、同誌が日本における文学館研究の重要な資料となっている²⁾。さらに2008年からは、文学館における資料の翻刻や研究成果などを文学館職員自身がまとめ上げ、世の中に広く公開していく目的で、『全国文学館協議会紀要』という研究誌も創刊されており、それぞれの文学館の所有する資料を、広く世の中に公開しようとする取り組みへと繋がっている。

また、全国文学館協議会設立以降の議論の成果をもとにする形で、前日本近代文学館理事長（全国文学館協議会の現会長を兼任）の中村稔は、2011年初頭に、『文学館を考える：文学館学序説のためのエスキス』を出版している³⁾。以上のように、昨今の文学館経営に関するさまざまな議論が、ここ十数年のなかで、文学館関係者を中心として活発化している。筆者自身も、2006年に発表した博士論文を始めとして、主に図書館情報学の観点に立ちながら、文学館を主題としたいくつかの論文を執筆しており、そのような昨今の文学館研究に対する熱の高まりに参加している⁴⁾。

2. 文学館の発達史

2.1 文学館の誕生

そもそも、「文学館」という概念が確立された時期は、時代的に考えてみても、それほど古いことではない。固有名詞として「文学館」を館名に用いたのは、1962年設立の日本近代文学館が最初の事例である（図1）。



図1 日本近代文学館の外観

その活動は、現在でも約半世紀ほどの時間であり、先行する図書館や博物館などの社会教育施設と比べると、その歴史の積み重ねは少ないものとなっている⁵⁾。

しかし、日本近代文学館の設立のタイミングに合わせる形で、そのような「文学館」という表現が、即座に一般名詞化したわけではない。文学館のガイドブックを調査対象に用いた筆者の研究によれば、一般名詞として「文学館」という用語が安定的に用いられるようになったのは、おそらく1990年代半ばくらいになってからのことであり、そこにはおよそ30年の時間的なズレが生じているものと考えられる⁶⁾。

1990年代半ばは、前述した全国文学館協議会が発足した時期とも一致しており、「文学館」という括りでそれらの諸施設が認識され、研究対象として取り上げられ始めた時代

*おかの ひろゆき 皇學館大学
〒516-8555 三重県伊勢市神田久志本町1704番地
Tel. 0596-22-6385 (原稿受領 2011.3.23)

状況を反映していることになる。文学館に関する議論の流れには、図書館情報学や博物館学、アーカイブズ学といった先行する研究領域の議論を参考にしつつ、文学という主題領域に特化した資料保存や公開のあり方を模索しようとする過程を見て取ることができる⁷⁾。

2.2 文学館の設立目的と文学館設立運動

日本で最初の本格的な文学館として形作られ、その後の全国各地の文学館づくりのモデルにもなった日本近代文学館は、その草創期の歴史を辿ってみると、博物館としての機能を念頭に置いた展示業務と、図書館としての機能を果たそうとする資料提供業務とを、文学館活動の二つの柱として考えていたことがわかる⁸⁾。このことは、日本近代文学館の活動目的や事業内容として、①日本近代文学図書館の設置および経営、②日本近代文学博物館の設置および経営、③講演会、講座、展覧会、談話会および映画会その他文化集会の開催、④その他目的の達成に必要と認められる事業、という4項目を、1963年という初期の時点で掲げていることから確認ができるだろう⁹⁾。日本近代文学館の創設メンバーの一人である伊藤整も、その設立意義について、“近代文学の総括的な博物館兼図書館である”と表明しており、図書館と博物館という二つのキーワードが、文学館関係者の間で強く意識されていたことが見えてくる¹⁰⁾。

その沿革を確認してみると、設立から駒場での正式な開館に至るまでの間における展示業務については、日本近代文学館独自の施設を所有していなかったこともあり、多数の出版社や新聞社などの協力のもとに、百貨店での展示会を行うことで、その当時の文学館設立運動の気運を高めていたことが確認できる。なかでも大きな話題となったのは、1963年に新宿伊勢丹で開催された「近代文学史展：文学百年の流れ」であり、これは出品点数が約5,000点、出品者が350名を超えており、それまでには前例が存在しない、非常に大規模なものが展開されたと記録に残されている¹¹⁾。入場者数も当初の予想を超える約42,000名を数えており、日本近代文学館の開館に向けて、世の中から大きな反響が得られることに繋がったと考えられる。

その当時のことについては、日本近代文学館の元事務局を務めていた倉和男が、“研究者など以外の当時の人々には、さらに、まだ原稿などの生資料に接する機会どころか、過去の貴重な雑誌や初版本に接することも容易ではない状況の時代でした。如何に当時の人々が文学の資料に接することに飢えていたかを物語っているようです”と回想している¹²⁾。さらに、日本近代文学館が設立準備の段階にもかかわらず、その建物も完成する以前の1964年には、第12回菊池寛賞を受賞するに至るなど、活動初期の頃からさまざまな方面からの支援が得られるようになった¹³⁾。そのような大きなインパクトを与え続けていくことで、1960年代前半の文学館設立運動は、急激に熱が高まっていくことになる。

2.3 文学館の図書館的機能

文学館と呼ばれる施設が、図書館的な機能を有することを念頭に置きながら設立に至った背景には、二つの要因があったと考えられる。

一つ目は、文学館における図書館的な業務を形作るに際して、国立国会図書館の協力を得られたことが大きい。特に、日本近代文学館固有の分類法を作る際には、『日本十進分類法』を形作った森清を始めとして、弥吉光長、宮坂逸郎などの専門家が集まり、文学館業務にふさわしい特殊分類法作成のための合同討議が、完成にこぎ着けるまでに幾度も行われている。日本近代文学館側からは、稲垣達郎、塩田良平、小田切進らがこの会議に参加し、あるいはまた、後に日本近代文学館の正規職員として、東京都立日比谷図書館から司書として移籍してくる大久保乙彦なども、このときの国立国会図書館との討議メンバーに加わっている¹⁴⁾¹⁵⁾。これについては、日本近代文学館自身も、“専門図書館として、研究者・利用者の詳細で多岐な要求にこたえようという意味で、日本十進分類法を基礎に文学・演劇部門を微細に分類展開するという独特の努力がこめられた”と館報に記している¹⁶⁾。

この分類法は、当初「K分類」と呼ばれていたものだが、これは分類規程が複雑すぎるために、実際の利用に支障を来す点が多いという判断がなされてしまうことになる¹⁷⁾。そのため、「K分類」を叩き台とする形で、国立国会図書館の職員の協力を得ながら、さらなる簡略化のための再検討がなされ、1964年2月に「日本近代文学館分類法」が完成することになる(図2)。

日本近代文学館分類法 (抜粋)	日本十進分類法 (抜粋)
【9 文学】 91 日本文学 910 総記・参考図書 (日本文学全般にわたるもの) 911 研究書 (日本文学全般にわたるもの) 912 古典文学研究 (江戸時代以前のもの) .5 古典文学作品・作品研究書 .8 古典文学作家研究 913 近代文学研究 914 近代詩歌研究 917 近代児童文学研究 918 近代文学作家研究 91Y 作品集 (全集・選集)	【9 文学】 91 日本文学 910 日本文学 911 詩歌 912 戯曲 913 小説・物語 914 評論・エッセイ・随筆 915 日記・書簡・紀行 916 記録・手記・ルポルタージュ 917 箴言・アフォリズム・寸言 918 作品集 919 漢詩文・日本漢文学

図2 日本近代文学館分類法と日本十進分類法の比較

その大きな特徴は、“日本の近代文学に関する一切の資料を原形のまま保存し、かつ絶えず高度の専門的要求にも応じられるもの”を目指したということにある¹⁸⁾。これは「日本十進分類法」を元にした日本近代文学固有の分類法として、今日まで継続して用いられている特殊分類法となっている¹⁹⁾。

二つ目に、現在の東京都目黒区駒場に本拠地を決定する以前に、実際の文学館業務を行うスペースとして、国立国会図書館上野支部図書館(現・国際子ども図書館)の空き部屋を間借りする形で、「日本近代文学館文庫」の活動を開

始できたことも大きい。この頃は、もっぱら国立国会図書館の職員のアドバイスを得ながらの活動であり、そのときのサポート体制については、保昌正夫が“図書の分類、配架、カードの作製等の仕事はまずまずスムーズに運ばれているようだ”と報告している²⁰⁾。つまり、国立国会図書館の存在は、日本近代文学館というそれまでにはない新しい形の専門図書館づくりを考えていく上で、安定した活動基盤を得るための土台となるものだったと考えられる。

以上のように、文学館の歴史を辿っていくと、既存の図書館が有していた業務体系のノウハウを学び取り、それを文学領域に特化する形で活動方法を模索してきた過程が見えてくる。日本近代文学館自身が、自分たちの活動について、文学を対象とした「専門図書館」と呼称することも多かったことを考えると、その文学館づくりの出発点において、いかに図書館のノウハウから受けた影響が大きかったかが見えてくるだろう。

2.4 文学館の博物館的機能

とはいえ、今日における文学館という施設は、図書館的な側面が強調されるよりも、むしろ博物館の一種としての位置づけがなされることも多い。たとえば、北海道内であれば、市立小樽文学館（小樽市、1978年開館）、北海道立文学館（札幌市、1995年開館）、三浦綾子記念文学館（旭川市、1998年開館）などが、登録博物館として活動を行っている²¹⁾。あるいは日本近代文学館では、設立当初から図書館委員会と同時に博物館委員会を組織しており、さらには学芸員資格取得のための博物館実習の単位にもなる「文学館演習」を、毎年夏期に開講しているように、博物館としての役割を担う側面をも強く押し出している²²⁾。

そもそも日本近代文学館は、久松潜一が“歴史の方に資料編纂所があるように日本文学にも資料研究所のようなものがあって、そこに各時代にわたる日本文学の資料が集められ、整理されていたら、日本文学の研究にどんなに役立つであろうか”という個人的な希望をもとに、“そこには作品の諸本は言うまでもなく、それに関係のある資料が集められ、原本で手に入らないものは複製なり、マイクロ・フィルムでなり集めてあることが望まれる”と述べているように、もともとはその当時に失われつつあった日本近代文学領域の資料を収集し、それらを文学研究のための調査に用いることを目指して設立されたものである²³⁾。

しかし、日本近代文学館の後に全国各地に建てられた数々の文学館は、研究者のための資料調査の施設というよりは、一般の観覧者に対して資料展示を行う側面が強い傾向にあるというのが実態だろう。たとえば、白樺文学館（我孫子市、2001年開館）では、その設立目的のなかで、“権力や権威に頭を下げず、既存の道徳に敢然と挑んだ「白樺」の若き獅子たち。強烈な自立心を持ち、なにものをも恐れなかった彼らの息吹を吸うための愉しく素敵なスペースを創ること”と述べていることから確認できる²⁴⁾。

このような傾向は、それぞれの地域社会における地域資料の保存施設であると同時に、地域にゆかりのある文学者

を知るための学習施設や社会教育施設としての役割も期待されていることを示している。あるいはまた、地元の住民だけではなく、外部からその土地を訪れてくる観光者に対する、観光スポットとしての期待も寄せられているだろう。少なくとも文学館では、収集した文学資料を何らかの形で展示し、観覧者に見せる取り組みが求められている。

3. 図書館としての文学館

3.1 図書館の役割と文学館の立ち位置

前述したように、文学館と呼ばれている施設は、そもそも先行する施設である図書館と博物館を参考として、その両方の機能を同時に推し進めることを念頭に置かれて形づくられたものである。そのような施設の成り立ちを前提として、それが図書館と連携する形について考えてみたい。

文学館が図書館と連携する事例を探ってみれば、それは大まかに、以下の4種類のケースが考えられる。

- ① 図書館と文学館がそれぞれに独立し、異なる施設間同士で業務の連携を行うもの。
- ② 図書館と文学館が複合館として形づくられ、一体的な活動を行っているもの。たとえば、青森県近代文学館と青森県立図書館、大阪府立中央図書館と大阪府立中央図書館国際児童文学館、熊本県立文学館と熊本県立図書館などが考えられる。
- ③ 図書館内に文学館的な資料展示施設を含むもの。たとえば、ゆうき図書館内の「新川和江コレクション」、日暮里図書館内の「吉村昭コーナー」、大阪樟蔭女子大学付属図書館内の「田辺聖子文学館」などが考えられる（図3・図4）。
- ④ 文学館内に図書館的な資料調査や読書コーナーを設けるもの。たとえば、世田谷文学館内の「ライブラリー」、古河文学館内の「図書コーナー」などが考えられる（図5）。

いずれの形態で場合であっても、手稿資料（直筆原稿や書簡、日記類など）や遺品など、一点ものの貴重な文学資料をコレクションの中心に据え、その資料公開のあり方や、

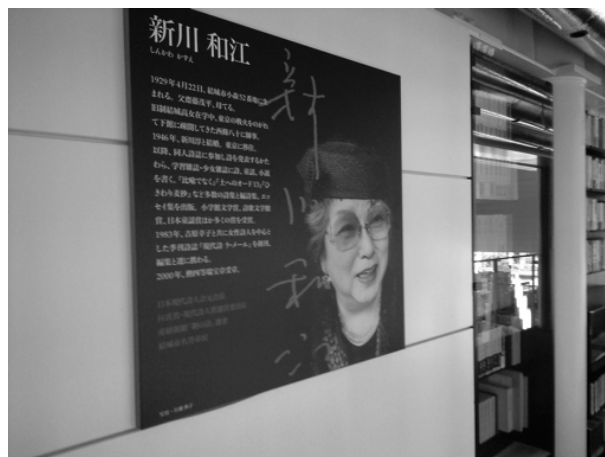


図3 ゆうき図書館内の「新川和江コレクション」



図4 日暮里図書館内の「吉村昭コーナー」



図5 古河文学館内の「図書コーナー」

作家・作品に関する情報提供の方法を、それぞれの文学館や図書館の日常業務のなかで、適切な方法を模索していることに大きな違いはない。

文学館で扱っている資料は、主に博物館や文書館で保存されているような、現存するものが一点のみの貴重資料が数多く保存されている。一方で、主に図書館で取り扱っているような複製された印刷資料も幅広く収集対象としているため、両方の特徴を効果的に活かしていくことが求められる施設になっている。特に一点ものの資料については、田良島哲が「何を見るか」という選択の主体が、図書館では蔵書という枠の中ではあるが、利用者側にあるのに対して、博物館では館側が「何を見せるか」という選択がまずはたらしき、それ以外の「見る」はすべて「特別」になるというのが、MとL(AもLに近い)との間での大きな差異なのである」と指摘することで、その情報公開の面での難しさや作業の遅れを指摘しているように、今後も資料活用方法の検討は続けられることになるだろう²⁵⁾。

3.2 図書館と文学館との連携への期待

以上述べてきたように、今後の文学館と図書館との連携を考える際には、次の二項目を確認しておくことが求めら

れるだろう。

まず一つ目は、文学館という施設の存在が、既存の図書館、博物館、文書館という枠組みを横断する存在でありつつ、そのすべての施設の機能を兼ね備えなければならないことである。日本近代文学館の設立の背景からも伺えるように、文学館と呼ばれる施設は、博物館の歴史の一部だけではなく、図書館の歴史の流れの一つとしても位置づけることも可能である。今日の文学館活動を眺めてみると、どちらかといえば博物館的な展示の側面が目立っている状況にあるように思える。しかし、単に資料の展示にのみ注目するのではなく、「文学という主題に関するあらゆる情報を提供する施設」というように、より大きな観点に立てれば、文学館の掲げる文学という主題は、図書館、博物館、文書館という既存施設の枠組みに囚われるわけではなく、そのいずれの領域にも関連していることが見えてくる。すなわち、一般にMLAと称される博物館、図書館、文書館という3分法による枠組みが、果たして文学館に当てはめることが妥当なのかについても、改めて問われなければならない。この辺りの施設間による資料の性質の違いについては、安達匠がMLA連携に関する議論のなかで、「かつては曖昧模糊としていた、博物館と図書館とがきれいに分かれたのは、実はコンテンツを扱う部門が違う」からであると指摘していることとも関連してくるだろう²⁶⁾。施設間の連携についての議論は、施設そのものの運営のあり方を問う視点も大事なことだが、その一方では、それらが保存している資料そのものに注目することも重要な視点となるだろう。

二つ目に、施設に関する議論に留めるのではなく、収集する資料そのものに着目することで、対象とする主題領域を、文学以外にも拡張していくことの重要性である。先に指摘したように、文学領域については文学館という施設が存在しているために、MLAの3施設を横断する視点を得ることができたわけだが、このような視点は、何も文学(9類)という主題に限定されるものではなく、さまざまな主題領域をもとにして押し出すことは可能である。たとえば、日本近代音楽館(2010年3月で閉鎖され、その後は明治学院大学に資料移管)のような音楽を主題とした施設が存在するように、あるいは、数多くの美術館が全国各地に建てられているように、芸術(7類)という主題を掲げることが可能である²⁷⁾。また、東京大学経済学図書館やエル・ライブラリーなどの事例のように、経済学や労働問題などの社会科学(3類)という切り口で見ていくことも可能だろう²⁸⁾²⁹⁾。

4. おわりに

日本近代文学館を始めとする全国各地の文学館の活動の歴史は、ようやく半世紀の時間を積み重ねたところであり、戦前から脈々と続く図書館や博物館、あるいは文書館の歴史と比べても、文学館に関する議論や研究の余地は数多く残されている。

ただし、その際には、文学館という施設の枠組みを論じ

る視点だけではなく、図書館、博物館、文書館などの諸施設との関係のなかで、あるいは、文学研究者や遺族、自治体、地域住民、出版社、古書店などとの関係のなかで、文学資料や文学研究に関するさまざまな情報が、世の中でどのように流通しているのかというように、より大きな視点や異なる切り口での議論の積み重ねも求められることになるだろう。

注・参考文献

- 1) 全国文学館協議会事務局. 設立の主旨. 全国文学館協議会. <http://www.bungakukan.or.jp/kyougikai/seturitu.htm> [accessed 2011-03-22].
- 2) 2011年3月22日現在, 第49号まで発行されている。
- 3) 中村稔. 文学館を考える: 文学館学序説のためのエッセイ. 青土社, 2011, 205p.
- 4) 岡野裕行. 日本近代文学研究における文学館の役割: 「全国文学館協議会」加盟文学館の発行物を中心に. 筑波大学, 2006, 博士論文.
- 5) 日本の文学館史上もっとも古い事例となるのは, 1952年設立の藤村記念館(岐阜県, 開館は1957年)だが, 館名の固有名称として「文学館」という用語を初めて使用したのは日本近代文学館である。時代的には藤村記念館が先行しているとはいえ, 名実共に今日的な「文学館」という施設が形作られたのは, 日本近代文学館が活動を開始したときに始まったものと考えられる。
- 6) 岡野裕行. ガイドブックを用いた〈文学館〉概念の変遷に関する予備考察: 〈文庫〉の時代から〈文学館〉の時代へ. 情報メディア研究. 2011, vol.9, no.1, p.15-35.
- 7) 中村稔. 文学館の使命: 図書館的機能と博物館的機能. 全国文学館協議会会報. no.17, 2001, p.8-9.
- 8) 日本の潮4: 発足近い日本近代文学館. 世界. 1963, no.214, p.166-169.
- 9) 日本近代文学館設立準備委員会. 日本近代文学館の目的・事業・役員. 日本近代文学館ニュース. 1963, no.1, p.2.
- 10) 伊藤整. 予想以上の進展. 日本近代文学館ニュース. 1963, no.1, p.3.
- 11) 日本近代文学館事務局. 大きな反響をよんだ近代文学史展. 日本近代文学館ニュース. 1964, no.4, p.6.
- 12) 倉和男. “1. 文学的遺産の保存・公開運動の歴史的経緯”. 文化遺産保存と木下木太郎文庫. 奈太郎会, 2002, p.1-12, (奈太郎会シリーズ, 18).
- 13) 日本近代文学館. 菊池寛賞を受賞: 近代文学館の努力と熱意に. 日本近代文学館ニュース. 1964, no.4, p.1.
- 14) 日本近代文学館. 近代文学館文庫の準備進む: 各方面からの支援を受けて今秋十一月二日に開設. 日本近代文学館ニュース. 1964, no.4, p.1.
- 15) 岡野裕行. “文学館業務を形作った図書館職員・大久保乙彦の活動: 1960年代の都立日比谷図書館と日本近代文学館”. 第57回日本図書館情報学会研究大会発表要綱. 日本図書館情報学会. 2009, p.57-60.
- 16) 日本近代文学館. 専門図書館の特色生かす: 近代文学館文庫の分類法. 日本近代文学館ニュース. 1964, no.4, p.7.
- 17) Kの記号は, 「近代文学館」のローマ字表記の頭文字を取ったもの。
- 18) 日本近代文学館. 専門図書館の特色生かす: 独自の近代文学館の分類方法と保存の方法. 日本近代文学館ニュース. 1964, no.5, p.6.
- 19) 「日本近代文学館分類法」は, 後に神奈川近代文学館が姉妹館として形づくられる際に, 若干の不備を修正する形で, 「神奈川近代文学館分類法」として発展していくことになる。
- 20) 保昌正夫. 文庫から. 日本近代文学館ニュース. 1964, no.4, p.8.
- 21) 北海道教育委員会. 北海道の社会教育 H12年版. 北海道教育委員会, 2000-04-01, <http://www.dokyo.pref.hokkaido.lg.jp/hk/sgg/move/syakyosiryoy/nendosiryoy/h12/010.htm> [accessed 2011-03-22].
- 22) 日本近代文学館文学館演習: 日本近代文学資料の探索と処理. 財団法人日本近代文学館. <http://www.bungakukan.or.jp/annai/annai.htm#enshuu> [accessed 2011-03-22].
- 23) 久松潜一. 日本近代文学館について. 日本近代文学館ニュース. 1963, no.1, p.3.
- 24) 武田康弘. 白樺文学館 設立の趣旨: 民知を創り出すコミュニティ・スペース. 白樺文学館公式ホームページ. 2000-10-12, http://wwwh.sirakaba.gr.jp/tenmatu_ki/home/seturitu.htm [accessed 2011-03-22].
- 25) 田良島哲. “博物館の情報環境と MLA 連携”. MLA 連携の現状・課題・将来. 勉誠出版, 2010, p.77-85.
- 26) 入江伸, 佐藤毅彦, 八日市谷哲生, 田良島哲, 田窪直規. “〈連携〉へ向けて: MLA の現場から”. MLA 連携の現状・課題・将来. 勉誠出版, 2010, p.93-115.
- 27) 明治学院. 10. 日本近代音楽館の維持と一般公開. 明治学院. 2010, <http://www.meijigakuin.jp/150memorial/#jigyoy10> [accessed 2011-03-22].
- 28) 東京大学経済学図書館. 2007-04, <http://www.lib.e.u-tokyo.ac.jp/> [accessed 2011-03-22].
- 29) エル・ライブラリー: 大阪産業労働資料館 働く人々の歴史を未来に伝える図書館. 2008-10-21, <http://shaunkyo.jp/> [accessed 2011-03-22].

Special feature: Capabilities of collaborations with libraries. Library and Literary Museum collaboration. Hiroyuki OKANO (Kogakkan University, 1704 Kodakujimoto, Ise City, Mie Prefecture 516-0016 JAPAN)

Abstract: Facilities called “literary museums” have the function of being libraries specialized in literature. They also have the features of being museums and archives. There are differences in the ways in which libraries and literary museums are linked with one another, depending on the scale of the facility. When considering issues related to such linkages, it is necessary to not only focus on the format of each facility and how they operate, but also individual groups, as well as topics and fields of materials to be collected.

Keywords: library / literary museum / museum / archives / literary materials